



湾岸・アラビア半島地域ニュース

米大統領選挙オバマ当選に対する湾岸アラブ諸国+イラクの反応(11月6-7日付各紙)

米大統領選挙でオバマ氏が当選したことを受けて湾岸アラブ諸国(+イラク)で見られた政府レベルでの公式反応、及びアラビア語各紙の論調を、中東調査会でまとめたところ、以下のとおり。

公式反応

<イラク>

政府はオバマ氏の当選を歓迎する声明を発表し、イラク・米国両国国民の利益となりイラクの安全と安定を実現するような協力を真に望むことを表明。

タラバーニ大統領も同声明と同じ趣旨の祝電をオバマ氏宛てに発送。

大統領府「米国のイラク政策は一つであり、オバマ政権で生じるかもしれない変更は技術的なものに留まるであろう。」

大統領府は、新大統領の誕生によってイラク駐留米軍の地位協定が影響を受けることはないものと見ている。また、同協定に対するイラク政府の立場も変わることはないことを断言。

ズィバーリ外相「オバマはイラクからの米軍撤退を急ぐことはなからう。」

<サウジアラビア>

アブドゥラー国王が5日、オバマ氏に祝電を発送。その中で、友好国同士である米国・サウジ間の歴史的かつ密接な関係の堅固さを称賛。

スルターン皇太子も同日、同様の祝電を発送。

<クウェイト>

サバーハ首長がオバマ氏に祝電を発送。その中でクウェイト・米国両国の歴史的な結びつき及び両国のパートナーシップ関係を称賛するとともに、同氏がこの関係の発展のために努力を継続することへの希望を表明。

ナウーフ皇太子、ナーセル首相、ホラーフィー国会議長もそれぞれオバマ氏に祝電を発送。

<バハレーン>

ハマド国王がオバマ氏に祝電を発送。その中でバハレーンが米国との歴史的且つ堅固で素晴らしい関係を更に強化することを希望している旨表明。

<カタール>

ハマド首長がオバマ氏とバイデン氏それぞれに祝電を発送。

タミーム皇太子も両氏に宛てて同様の祝電を発送。

ハマド・ビン・ジャーセム首相兼外相がオバマ氏とバイデン氏それぞれに祝電を発送。

< U A E >

ハリーファ大統領がオバマ氏に祝電を発送。

ムハンマド・ビン・ラーシド副大統領兼首相（ドバイ首長）がオバマ氏に祝電を発送。

アブダビのムハンマド・ビン・ザーイド皇太子がオバマ氏に祝電を発送。

< オマーン >

カーブース国王がオバマ氏に祝電を発送。その中でオマーン・米国両国間の友好関係と協力の更なる発展を希望。

非公式反応

< イラク >

シーア派の反米勢力の領袖であるムクタダ・サドル師はオバマ氏の当選を歓迎し、同師のスポークスマンは、オバマ氏の当選は、イラクからの米軍撤退という米国民の希望に応える形で実現されたものであると表明。

< クウェイト >

強硬派イスラーム学者のハーメド・アリーはウェブサイト上に掲載された声明の中で、イスラーム世界はこの例（オバマの当選）から利益を引き出し自分達も変化を要求するべきであり、無知と不正義によって国を導いている体制を取り除かねばならないと表明。

湾岸アラビア語各紙反応

< 6日付アルハヤート（サウジ資本） >

サミール・サアダーウィー（ベイルート）寄稿文：

オバマのミドルネームである「フセイン」という名は、911事件以降嫌疑の檻に閉じ込められてきた世界の大きなグループ（訳者注：イスラーム教徒を指すものと思われる）に対して手を差し伸べることになり、このことはオバマの目の前に、より広範な地平を開くものである。

米国はブッシュの政策に見切りをつけ、自国のリーダーシップに新しい顔を提供した。この新しい顔は、「昨日の敵」と話し合い、「昨日の問題」に対処することができる顔である。

大統領就任直後オバマは、国内の経済・社会危機に対処しなければならない。それは、教育・保健など基本的な部門における国民の福祉を保障するために国家の介入の必要性を説く政策に従うものである。このためオバマ政権の一期目の大半は、新しい外交政策の策定に費やす機会がないであろう。

<6日付アッシュクルアウサト（サウジ資本）>

フセイン・ショボクシー（サウジ人）寄稿文：

オバマは変化を呼び掛けたが故に勝利した。8年間に及ぶブッシュ政権の後、米国はオバマを迎える準備ができていた。変化が必要とされていた。ブッシュがその軽率さで以って道をならしていたからこそオバマはこれほどの大勝利を収めることができたのである。

今、オバマの両肩にのしかかる課題は重い。オバマは世界に対して、米国の正義がグアンタナモではないこと、米国の価値観はアブーグレイブとは無関係であること、米国の資本主義制度はリーマンブラザーズとは程遠いものであること、世界は「With us/Against us」などとヒステリック且つ滑稽なやり方で分割されるべきではないことを自ら示していかなばならない。

理性と論理が勝利し、過激主義と人種差別、愚劣が敗北したのである。オバマよ、おめでとう。彼の勝利が傲慢な者たちへの大きな教訓となることを切に希望する。

<7日付アルハヤート紙（サウジ資本）>

アムル・ハムザーウィー寄稿文：

アラブとしてはオバマ当選から期待できるものは少ない。撤退に向けたイラク駐留米軍の再編、対イラン政策、イスラエルの安全保障がオバマ政権の優先課題となる一方で、パレスチナ問題をはじめとする我々の中心的な問題は、特に同政権の1、2年目においては戦略的な関心と呼ぶことはないであろう。オバマの当選は確かにアラブ世界での米国のイメージを変え、善と悪の枢軸、穏健派と過激派の二分論といったブッシュの遺産を克服するための信頼性を米国に与えることになるだろう。しかし、米国の政策は急速な質的变化を見ることはないであろう。

<7日付アッラーヤ紙（カタール発行）>

バーバクル・イーサ寄稿文：

世界各地の人々の理性と心の中での米国のイメージは醜いものになってしまった。今やそれは、戦闘機や戦艦に乗って世界の各大陸を我が物顔でほっつき回り死と破壊をばら撒いて平和を埋没させる殺人者という攻撃的なイメージとなってしまっている。オバマがホワイトハウスにやって来るからといって、このイメージが一朝一夕に変わることは決してあり得ないが、単にオバマが当選したこと自体が米国から世界の各国民に向けたメッセージとなっている。そのメッセージとは、変化がやって来ること、そして世界を協力と協議、対話の場に向けて導く米国の新しい姿がやがて現れるというものである。

<アルカバス紙（クウェイト発行）>

アワド・ムテイリー寄稿文：

ロバ（民主党）がホワイトハウスの主になる時、我々アラブは、象（共和党）の扱いで慣れていたものと異なる新しい段階に備えなければならない。この新段階のメインタイトルは、人権でありマイノリティーであり動物（愛護）である。民主党は共和党とは違って、これらの権利に関して我々を甘やかすことはない。このことは、今後4年間のアラブ世界と米国の関係が脆弱なものになるということを意味する。アラブにおいてロバは愚かさの象徴であるが、民主党のロバに対して、アラブ世界は人権の理解において西洋世界とは異なることを納得させようというのは無駄なことである。

<アルイッティハード紙（アブダビ紙）>

リヤード・ナアサーン・アーガー寄稿文：

私は、オバマがホワイトハウスの椅子に座ることに関して今の時点で楽観したり悲観したりしようとは思わない。何故ならば、米国の政策を導いているのは大統領一人ではなく、諸機構及び中心的な諸勢力こそが米国の政策を策定し、その行動を定めていることを知っているからである。

我々が望むことは、新大統領が健全で人道的な論理に立ち戻り、人権侵害、国際法の軽視、暴力の行使、組織化された国家テロをやめ、国際問題の解決策として外交のみに依拠することである。

（中東調査会研究員 河井明夫）

本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799